毎日歌壇

米川千嘉子 選

苦しみを右手左手に持ち替えて倒れてしまわぬように歩く　広島市　堀　眞希

△評▽重い荷物を両手で持ち替えるように「苦しみ」を持ち替えてやり過ごす。身体や生活の実感のある比喩がリアルだ。

鳥獣に取られますので伐りましたブルーベリーを枝ごと持ち来　京丹後市　山副美佐子

△評▽ご近所からか。枝を瓶に差して色づいた実を鳥みたいに食べた、ともう一首。

サイレンが過ぎ行くまでをしばし待つ派遣会社の電話面接　千葉市　佐藤　綾子

田植え機の植え残したる隅っこに人間達はどろんことなる　日南市　宮田　隆雄

お札から解き放たれし一葉さん　一枚だけを文箱に仕舞ふ　堺　市　梶田有紀子

縁起でもないと敬遠死の話わたしは好きよそう近未来　岡山市　久山　順子

自らを介護してゐる一人居に紫陽花の色ゆるりと変化　坂戸市　納谷香代子

昭和三十三年米国映画「大いなる西部」グレゴリー・ペックの丸腰強し　生駒市　奥田　充子

ケアハウス寂しいと言えず退屈と言ってた父の歳に近づく　浦添市　座間味れい子

感情はいつもむき出し五歳児が自転車漕げば風の形相　札幌市　住吉和歌子

加藤　治郎 選

声がもう思い出せない　前触れはなく今朝パンが綺麗に焼けた　大津市　世田　夏雪

△評▽あなたはどんな声だったのか。思い出せないのは不思議なのだ。パンがきれいに焼けたことは新しい自分を感じさせる。

月を剝ぐようなセリフだ　きみだってずっと一人でいたんだろうって　奈良市　古井さらさ

△評▽冷え冷えとした思いが伝わってくる比喩である。促音が心を連打するのだ。

君がいて普段通りに笑っててその背景が違うだけの日々　横浜市　友常　甘酢

とわという器を青春がふちどって手に収まった就労移行　平塚市　芝澤　樹

再配達の再配達の再配達の再配達のキムチ　浜松市　尾内甲太郎

「踊り場で踊ってる人見たことがないけどきっと雨上がりだよ」　神戸市　入間しゅか

ひとが死ぬ映画見ながらポップコーンほおばる君の首にのびる手　名古屋市　外山　雪

乾いた土のように過ごすけどなにもかも指先で手に入る時代に　横須賀市　森久保りりか

Yシャツにネクタイ姿、テーブルのマイク、時計は16時すぎ　雲南市　熱田　一俊

我々は宇宙人です、扇風機驚く顔で今日も首振る　静岡市　海瀬安紀子

水原　紫苑 選

綿毛より軽い気持ちでえいゑんと風は言葉にしてしまふので　東　京　池田　宏陸

△評▽風の発語する永遠は耐えがたく、人間たちは聴かないようにつとめて、いつか聞こえなくなったのか。

この星の夜が長すぎてお花畑の花がみな真っ黒になる　甲府市　村田　一広

△評▽真っ黒なお花畑の異常なリアリティーが独特である。詩とはアイデアではない。

さざなみはしばらく生きるいらないと思へる前の言葉であれば　横浜市　永永　キヌ

ねぇホタル初めて光ったあなたの祖先いったい何を伝えたかった？　笛吹市　雪雪雪子

熱帯夜のアートセンター暗がりへあなたはディオゲネスだと告げる　浜松市　尾内甲太郎

からだから自由になればきみの頸に巻きつく蛇も話せただろう　平塚市　芝澤　樹

平らかな答えをならべそのように花を束ねてゆく、せんせいは　大阪市　羽水　繭

ほんとうのことを描いた絵　ゆび先に油絵具をべっとりつけて　雲南市　熱田　一俊

筒へ押し込まれた卒業証書の丸みを感じつつふと初潮　東　京　カ　ヒ

捩花はジャコメッティのをみなごの如くか細くよぢれつつ佇つ　名古屋市　浅井　克宏

伊藤　一彦 選

奄美の山に白い蛍と星が降るわれらは「さよなら」をもつひかり　横浜市　谷口　菜月

△評▽奄美の星空の下の幻想的な蛍の光りは有名。その夜に浄化された人間存在を歌う下の句が出色で、作者の感動が伝わる。

それで得た数秒間が何になるエスカレーター駆ける君たち　南魚沼市　木村　圭

△評▽忙しいのか、性分なのだろうか。エスカレーターを駆ける者への問いかけだ。

知り合ひにばつたりとあひし顔をして視線をくれる信楽のたぬき　大阪市　タカエレイコ

くしゃくしゃの鰻のチラシ握りしめコンビニ前におじいさん居る　大阪市　小熊　光子

庭に咲く折々の花呉れし人施設へ越すを見送れるなり　東　京　水原　理都

ミサイルが自爆するのに似ていたる夜空の花火みなが見ている　北名古屋市　月城　龍二

バイコヌル宇宙基地を地図で探す宇宙に行ったことはないけど　清瀬市　サトウカグミ

水面を底から見れば世界とは誰かの息で満たされている　加古川市　山田　麦

エチオピア選んでおけば間違いない君のおいしい聞けるコーヒー　川崎市　山川　然

青々と伸びている稲どうしたら誤魔化さず日々を肯定できるの　山形市　新道百合子

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます